

博士論文（要約）

ハンナ・アレントにおける近代教育批判の射程
—教育の時間性と暴力性をめぐって—

田中 智輝

本論文は、ハンナ・アレント（Hannah Arendt, 1906-1975）における教育をめぐる思考を手がかりとして、近代教育が根底に抱えている危機とはどのようなものであるのかを明らかにするとともに、そうした危機を超えて、自由な言論と活動そして思考のための空間へと子どもを導くために教育がいかなる転換を求められているのかについて、その展望を示すことを試みるものであった。

序章では、アレントの思想的変遷の概略を示したうえで、彼女の教育論の骨子を確認し、政治思想において教育論がどのように位置づけられているのかを示した。さらに、アレント研究の展開について、没後から 1980 年代前半、1980 年代中頃から 1990 年代、そして 2000 年代と三期に分けて整理した。そのうえで、教育学においては 1990 年代前半からアレントの近代教育批判が注目されるようになり、その後、教育における公共性の再編や政治教育の文脈において盛んに研究の蓄積がなされていったことを確認した。こうした教育学におけるアレント受容においてひとつの論点となったのは、彼女の政治論と教育論との関係をいかに理解するのかという点であった。とりわけ、政治論と教育論との整合性を見いだそうとする試みにおいては、「出生」概念が重要な結節点となっていることが指摘されており、こうした読解を通じて、アレントの教育論は、進歩主義的な教育論にも、保守主義的な教育論にも還元できない独自の含意を有するものとして評価されてきた。しかしながら、こうした研究においても、彼女が教育論において重要視している「権威」や「過去への態度」についての踏み込んだ検討には至っていない。先行研究の課題をこのように整理したうえで、本論文は、その未着手の課題を引き受けることによって、アレントの近代教育批判の射程と、その先に展望される教育の可能性を明らかにすることを試みるものであることを示した。

第 1 章では、「出生」概念をめぐるアレントの思索の変容を辿ることによって、アレントの教育への思考が醸成される過程を跡づけることを試みた。こうした試みを通じて、第一に、アレントの思想形成の始点には「人間世界」における他者の有意性をめぐる問いがあり、「出生」概念の生成過程は、こうした思想的文脈において捉えられなければならないことが示された。このことと関連して、第二に、アレントの教育をめぐる思考の淵源は初期のアウグスティヌス研究の中に確認でき、その後のマルクス研究において「出生」の意味が捉え直されたことによって、彼女の政治思想の核心に教育への思考が包含されるに至ったことが明らかとなった。そして、第三に、この「出生」概念の捉え直しは、アレントの思想に教育者の視点がもたらされることによって可能となったということが示されるとともに、従来対立的に捉えられていた政治論と教育論が、「出生」概念の生成においてその出自を共にしてい

ることが確かめられた。

第2章では、アレントの近代教育批判を端緒としつつ、彼女が世代をこえた世界の継承と更新に向けた「過去への態度」をどのように捉えているのかについての検討を試みた。検討を通じて示されたのは以下の三点である。第一に、アレントの近代教育批判は、近代教育が抱える困難性と可能性の両側面を示唆するものであることが確認された。彼女は、近代教育の試みを伝統の喪失によってもたらされた危機への応答の試みとして捉えたうえで、そうした試みが新たな危機を生んだことを指摘している。というのも、失われた伝統の位置に進歩の理念が据えられたことによって、子どもの新しさが既成事実と見なされ、その新しさが進歩のプロセスへと駆り立てられることで、かえって世界の継承と更新という教育の使命が放棄される結果となったのである。しかし他方で、アレントは伝統の喪失という事態に一定の可能性を見出しており、そこにおいて過去を論じる新たな手法の意義を論じていることが確認された。第二に、アレントが過去を論じる新たな手法をベンヤミンの思考に見出しており、その手法が過去と未来の裂け目においてなされる教育の営為においても有効であることが明らかとなった。そして、過去を論じる新たな手法において、われわれは、時間を過去から未来へと流れる連続的なものとしてではなく、過去と未来のせめぎ合いとして経験しているというアレントの洞察が示された。第三に、以上で得られた視角からアレントの教育論を再考することによって、彼女が世界の継承と更新に向けた教育にどのような可能性を見出だしているのかを明らかにした。こうした考察を通じて、過去の出来事の多様な語り直しは、語られることなくしては忘却に晒されている出来事を救済するという点で、世界の継承と関わりと同時に、そうして救い出された出来事が語られることによって世界に新しいものがもたらされるという点で世界の更新に関わっていることが示された。

第3章では、教育と権威の問題をめぐるアレントの思索を検討することによって、思考の領域としての教育のトポスにおいて要請される教育者の役割を明らかにすることを試みた。まずもって確認されたのは、世界とそこに新しく参入する者である子どもの双方を保護しつつ、両者を架橋するという試みを引き受ける際に「権威」が不可欠のものとして要請されるということであった。そのうえで、そこでの「権威」は、超越的な絶対者に依拠するものではなく、複数の人びとがそれぞれに新たな「始まり」であるという事実に根ざし、その「始まり」を保護し増大させるという働きかけを通じて行為遂行的にその正統性を得るものとして捉え直された。

第4章では、世界疎外の過程は活動的生活だけでなく、観照的生活にも変容をもたらして

いるというアレントの洞察に着目し、その変容が私たちの世界把握のあり方にどのような影響をもたらしているのかについて考察を試みた。考察を通じて、近代哲学が認識の前提とした思考の無世界性によって、結果的に20世紀において世界を蝕むこととなる無思考性としての悪が台頭する素地が準備されたことをアレントが批判していることが明らかとなった。そして、このような批判から転じて、彼女が世界について思考する新たな手法の模索へと向かったということが示唆された。さらに、本章では、アレントが思考とリアリティの分離を乗り越える試みに際して、「理解」の概念に独自の意味と可能性を見出していたことを指摘した。そのうえで、理解は、行為する人々が取り消し不可能な仕方で行った事柄や、避けがたく存在するものと和解し、世界に共に住まうことを可能にする試みとしての側面を持つものであるという点で、それ自体が行為としての側面をもつものであることが明らかとなった。

第5章では、理解の試みが教育においてどのように取り組まれているのかを検討するとともに、授業実践の事例から、教育それ自体をひとつの政治的実践の場へと組み換えていくための示唆を得ることを試みた。検討にあたっては、お茶の水女子大学附属小学校の「市民」の授業における論争問題学習の実践を考察の対象とし、そこに政治的な事柄を理解する過程において立ち現れる政治的主体化の契機を見出した。こうした検討を通じて、論争問題学習は、議論を構成している認識の枠組みへの問い直しを可能にするという点で、政治的実践としての萌芽を含むものであるとの示唆が得られた。さらに、本章では「非-合意」としての政治的主体化も含めた多様な政治的主体の現われについて、アレント、ムフ、ランシエールの政治的主体論を手がかりに考察を深めた。そして、ムフやランシエールの批判的視座を踏まえた上で、アレントの教育論へと立ち返ることによって、政治的共同体（ポリス）への同一化を要請するものであるかのように見える彼女の教育論に、それを相対化するような契機が内含されていることを明らかにした。

以上の検討をとおして、アレントの近代教育への批判は、世界疎外の過程をめぐる彼女の問題関心に根ざしたものであることが示された。そして、この世界疎外の過程に対して、アレントはその過程を逆戻りしポリスを再興するという懐古主義に与するのではなく、他者ととともに人間に固有の自由な空間としての世界を創設するための新たな手法に向けて思索をつづけたのであった。よってアレントが示唆する教育の試みは、世界疎外の過程に抗して、世界に新しさをもたらそうとするものであり、この点で教育は政治の外部にあって政治的共同体を補完するものにとどまらず、それ自体が政治的実践としてのポテンシャルを有す

るものであることが明らかとなった。また、最後に、本論文において残された課題を示し、その上で今後の展望を提示した。